

コンスタンティノープルの人口と生産機構

—学説史的展望—

米 田 治 泰

コンスタンティノープル（以下 CP と略す）をぬきにしてビザンツ帝国を語ることはできない。恵まれた地理的環境と豊富な人口は、この都市に同時代の他のすべての都市にない力と繁栄を保証した。まさに CP を制するもの世界を制す、であった。それだけにここに流れ込むものは全く数知れず、都民の大部分は、むかしからの土着市民ではなくて他処者、つまりパンや社会的榮進を求めて各地から集まってきたものであった。CP の社会的流動性はどこよりもいちじるしい¹⁾。そのうえ強力な国家権力の所在することが CP に特殊な性格を賦与した。都民は他に比べて特権的地位にあり、皇帝に対する賛同歡呼アクラマテイオンに加わったり、食糧の配分にあずかったりした。またしばしば属州都市を犠牲にした経済活動を行なった。だがその反面、かれらは国家権力への奉仕を義務づけられ、経済活動も国家から統制された。都知事（総督）が、出征中の皇帝の職務を代行したとか、宮廷の下層官人が都民からのみ選ばれたとかの事実も、首都と国家の関係を象徴する。このように CP は政治的にも経済的にも特異な存在であり、ここに見出される特徴が他のビザンツ都市にも妥当するかどうかは慎重に検討されねばならない。たとえば「経済活動に対する強力な国家干渉」がビザンツ全体の特徴とされてよいのかどうか。私は近年進みつつある属州都市研究が将来これらの問題に正しい答えを出すであろうと考える²⁾。そこでいまは CP の特殊性をよく示すと思われる二つの問題、すなわち10世紀の「総督の書」に集約的に表現された生産・商品流通のメカニズムと人口動態、とに限って、学説史的整理を行ない、問題の所在を明らかにしたいと思う。なお今更いうまでもないことであるが、「総督の書」(Biblion Eparchikon—以下 BE) とは、10世紀はじめ皇帝 Leon VI によって編まれたという組合規定で、CP の約 20 の同職組合 (systema) について、加入・生産・売買の方法、対国家関係、罰則規定などを詳細に記したものである。1893年、J. Nicole が発見した写本（ジュネーブ本）が、最も完全なものに近いが、その後の研究で、ジュネーブ本 BE が、10世紀当時に存在した CP の組合全部を網羅したのでないことが明らかになった³⁾。もっとも原本自体が全組合を扱っ

たのかどうかは全く不明である。本稿は、紙数の関係で BE の用語解釈に立入らないことをはじめにことわっておきたい。

I 「総督の書」をめぐる問題

BE の編者 J. Nicole は、text edition と時を同じうして、その内容を平易に紹介した一文を草し⁴⁾、BE からうける一般的印象として、9世紀末の CP の商工業の活発さの他に、いまひとつ、その繁栄を危くしつつある「危機の増大」をあげた。かれによると、ここでいう危機とは外敵からよりもむしろ内部から強まっている危機、とくに道徳の衰退となって現われている危機であり、その根元は他ならぬ、国家の経済干渉にあった。「国家の手が、生産・交換の全領域に重くのしかかったことはかつて一度もなかった。しかるに今日 CP はモノポリーと特権の天国 (paradis du monopole <et> du privilège)」と化し、厳しい国家統制が、生産面でも輸出入の面でも行なわれつつある。国家権力の代表たる^{エパルコス}総督からの監視と、組合員相互の監視とが行なわれている。これは個人の dignité ならびに自由に対する重大な攻撃ではないか。BE の罰則規定は、この人間の尊厳の蔑視と相い通ずる。ニコルには、BE にみえる笞刑や削髮刑は、ラテン人、ゲルマン人世界での断頭刑よりも、はるかに屈辱的、非人間的にみえた。市民の名誉と自由を忘れたこの社会は、その地理的な好条件と高い知的文化、過去の栄光にもかかわらず、やがて崩壊せねばならないし、現に崩壊している。ニコルは、このようにして、自由経済を称揚し、「モノポリーと特権の天国」を創った国家統制を悪の権化とみなした。古典的資本主義の天国で育ち、かつ経済の現実にとかつたかれにとって、国家統制は大きな驚きだったのであろう。

ニコルによる BE 編纂は学界に大きな反響をよび起こした。殊にドイツでは歴史学派の経済史家 L. Hartmann や H. Goerig が、理論に片よりがちであった古典経済学への批判の意図をこめて、意識的にこの史料の重要性を強調した⁵⁾。とくに H. Goerig は、ニコルの見解を踏襲し、末期ローマから10世紀までつづく国家の経済干渉——entreprise の発展を困難にする規制——が、ビザンツの将来の衰退の主要因の一つであると考えた。一方、文献学からは A. Stöckle が、厳密なクリティクを行ない、BE と Codex Iustianus との重複、およびエジプト・イタリア・ガリアでの類似組合の存続を根拠に、ローマ末期の組合 collegia と10世紀の組合 (systema, sōma) との連続性、従って CP のソーマのもつ強制団体 (Zwangsinungen) 的性格を強調した⁶⁾。

つづいてドイツでは L. Brentano の古典的論文「ビザンツ国民経済」が生まれた⁷⁾。

自由主義左派に属するかれは、古代から近代にいたる資本主義の発展系列の上にビザンツ経済を位置づけ、「西欧経済発展の萌芽」をここに積極的に見い出そうと試みた。すなわち、ブレンターノは、一方で「CPは独占の天国であり」、商業面で外国商人に制限を加えたのは不思議でないとしながらも、他方、「家内工業および工場工業という資本主義的経営型式ならびに大規模商業のほかに、古代以来不断に継続されてきた銀行業、運送業、帝国の軍務において資本主義が行なわれ」ていること、および「帝国滅亡に至るまで国家事業の遂行や国家歳入の徴収が資本主義的基礎において行なわれた」ことを強調した。そしてBEの組合についても、政治的にはともかく、経済的には中世末期の西欧の組合と同一であったと考えた。ビザンツは、資本主義的経済から貨幣収入を得ている国家であり、その強みは決して土地制度上の特質にあったのではなかった。つまりブレンターノはBEに資本主義的大企業を見出し、BEをニコルの如く悪の表われとは見なかったのである。

20年代に入り、BEを扱ったものとして、Ch. Macri⁸⁾、B. Mendl⁹⁾の論考が出たが、研究史の方向を大きく変えたのは、やはり、30年代のA. AndréadèsとW. Mickwitzの業績であった。

有名なギリシアの国民的経済史家であるアンドレアデスは、死の1年前に発表した論文のタイトルに、ニコルの言葉「CPはモノポリーと特権の天国だ」をそのまま掲げ、ニコル説批判を試みた¹⁰⁾。時代も既にかつての自由主義を許さなくなっている。かれはこの時代に生きるものとして、ニコルとは違って、régime corporatifを、社会要求に合致し、労働や消費面で真に役立つものと考えた。それにギリシア人として、過去の栄光を卑しめるが如きニコルの説には本能的に反発した。かれは次の三点を強調した。

(a)中世およびルネサンス期の西欧諸国にもBEと同様の規約があり、そこでは自国の利益のためBEと同じかそれ以上に、外人に対して厳しい行動規制をとっている。

(b)ビザンツの立法は先行する諸立法に比べてよりリベラルであり、末期ローマ帝国の如き、組合の対国家義務履行、所属組合の変更不許可、職業の世襲を知らない。

(c)皇帝はrégime corporatifから財政的利益(avantages fiscaux)を得ようとは考えていない。だからBEには、組合からの租税納入の記事がないし、また加入登録料も例外的にしか徴収されていない。もちろん、この体制が保守的伝統主義に墮する可能性は大きかったし、現実にもそういうことが起こったかも知れない。だが、CPにきた十字軍の兵士達が、この体制を悪いものと見ていないという事実や12世紀以降西欧都市の多くでCPの商工業規約が復活した事実から、régime corporatifに対するニコルの非

難は当たらない。

アンドレアデスはこのように述べたあと、ふつうビザンツについて云われている国家モノポリー、即ち、鉱山・石坑・塩田の開発、貨幣鑄造、武器生産そして問題の多い小麦・絹の生産・購入・売却などにふれ、ここでも三つの理由からニコル説を否定した。

(1) 鉱山・石坑・塩田の場合は本来の意味でのモノポリーではなく、古代・中世いづれにも見出される *droits régaliens* である。

(2) 武器・軍服の生産は *monopoles administratifs* であり、何ら国家収入の増加をめざすものではない。貨幣鑄造も然り。

(3) 小麦のモノポリーは異常事態にのみ行なわれる（たとえば Michael 7 世時代）ものであり、BE におけるパン(商人)への課税も民衆に廉価で食糧を供給するための措置で、財政的モノポリーでは決してない。プロコピオスは、ユスティニアヌスが小麦モノポリーを確立したと伝えるが、その記事と前後して、パン商人への重税賦課、および現物税の形で入った穀物のみを国家売却を伝えている。大体、国家はモノポリーなしでも充分に穀物取引を行なえた（租税の一部は現物で入ったし、広大な国有地が存在した。）のであるし、モノポリー確立よりむしろ首都の民衆への大量の、かつ安いパンの分配に留意していたはずなのだ。一方、絹のモノポリーに関して 6 世紀以降完全な国家独占に移行したとの説は正しくない。たとえユスティニアヌスの絹独占を信ずるとしても、それは絹工業の普及前にごく一時的に起こった現象にすぎない。BE からも、10 世紀の絹の生産と取引は若干の製品（紫衣など）を除き、自由に組合の手で行なわれたと、判断できる。

こうして具体的にビザンツの特殊事情を明らかにしたうえで、アンドレアデスは結論した。ビザンツのモノポリーは国庫の利益のみを追求する *fiscal* なものではなく、むしろ *administratif et économique* なものであり、また一方ビザンツの特権と干渉主義は、他の国々と少しも異ならず、プトレマイオス朝やルネサンス期の君主のモノポリーの方がずっと徹底していたと。要するに、アンドレアデスはビザンツ国家権力の経済統制に押された烙印を取除き、ビザンツの名誉を回復せんとしたのである。

これにつづいて、フィンランドの経済史家 G. Mickwitz もニコル批判を行なった¹⁴⁾。かれは、きびしい国家規制を抑圧 (*Bedrückung*) と混同した点にニコルの誤りをみた。事実は逆なのだ。BE から見る限り、国家の規制は CP の商人層に大きな利益を保証した。CP の組合はその生産において現代のカルテルを思わせる。ミクヴィツはこう考えて、ちょうどブレンターノが試みたように、BE に象徴される CP 経済に資本主義的要

素を認めようとした。具体的には、銀行業と手工業企業 (les entreprises industrielles) の存在を検出し、次いでそれらが西欧都市に継受されたことを明らかにせんとした。これはビザンツを、古代資本主義と近代資本主義との媒介者とする立場であった。かれはいう。BE の両替商 (trapezetai) は一見両替だけしかやっていないように見えるけれども、決して銀行業務を放棄しているのではない。BE のなかには、trapezetai に金を渡さず退蔵してはならないという規定があるし、CP 商人は金庫を trapezetai に預けるのがならいであった。当然10世紀にも、古代世界と同様の銀行業務が行なわれていたと見てよい。また「資本主義開始の最も注目すべき現象の一つたる entreprises industrielles」が絹工業にみとめられる。すなわち、絹工業には4つの関連組合——métaxopratai (生糸商人)、katartarioi (製糸工)、serikarioi (機織工)、vestiopratai (絹・ラシャ商人)——がありはじめ次のような工程が行われた。(i)製糸工は専ら生糸商人の手から原料(生糸)を仕入れ糸をすく、(ii)すかれた絹は再び生糸商人の手に入り、(iii)ついで機織工に売られ、織上げののち、(iv)最後に、vestioprataiの手で市場に出される。つまり、絹織物が一般市場に出る前には4つの組合の構成員の手を介さねばならなかったのである。だが徐々にではあるが、この複雑なプロセスを統合しようとの試みが現われる。それは機織工がみずから製糸と市場販売を行なう独立企業となろうとしたからである。この試みは、もし他組合からの妨げがなければ成功し、フィレンツェやオランダの如き企業が生まれたであろう。さらに10世紀には、従来の手工業者(組合員)の他に、CPの有力者——archontes——が積極的に企業家にならんとしていた。もちろん、CPでは、組合特権の強さと、貿易の受動的性格のために、フィレンツェの毛織物工業の如きものがそのまま生まれたわけではない。だが資本主義の萌芽は明らかに認められた。

ミクヴィツの論点は大体以上の通りであるが、ビザンツ経済に資本主義を見出さんとするのがその特徴であり、ブレンターノに相通ずるところが大きい。そしてこの立場は40年代に入り、イタリア生まれのアメリカ人 R. S. Ropez によってさらに推し進められた¹²⁾。

ロベスは論文の冒頭でいった。ビザンツ皇帝による絹のコントロールは、現代の米英露の「石油外交」、一代前の英独仏の「石炭・鉄外交」に対比できる。ちょうどアメリカ人が合衆国の工業資源から利益と誇りを得たのと同じ様にビザンツ皇帝と民衆は絹の国際的独占によって安泰を約束されている。だから国家統制を tyranny と見做すことは許されない。これがロベスの基本的立場であった。だが研究史のうえでのかれのユニークさは、絹外交そのものを論ずるところにあるのではなく、国内の絹の生産機構を新

たに見直した点にあった。従来の研究は、マクリを除き BE に記されたギルドにのみ眼を向けて、それ以外に存在したギルドに注意を払わなかった。この欠陥をただし、4—10世紀のギルドの諸形態の展開過程を跡づけたのがロペス論文に他ならない。

ロペスはビザンツの絹関係ギルドを二つの範疇、すなわち imperial guilds (dēmosia sōmata) と private guilds (sōmata) に分った。皇帝や宮廷人、内外要人のための高級織物・衣服を製造する帝室直営工場と、市場むけの第二級の織物を作り外国貿易に従事する BE 記載のギルドとがそれである。前者は、末期ローマの collegia (=state guild) の生産・管理組織をほぼ踏襲し、人的にもローマ・ギルドのメンバーの後裔を多数包摂する。そして両ギルドはいつの時代も併存したが、時代によって両者の比重は異なった。これについてのロペスの見解は次のようである。

4, 5世紀頃には国営絹ギルドの発展が、帝国の全般的労働力不足、国内の原料(生糸)の欠如、hierarchy through clothing の観念の未発達、の三つの要因によって著しく阻害された。国家はこれを克服するために、国立工場の職人の身分を凍結し、原料輸入に際しては一人の官吏 Comes Commerciorum per Orientem の手を通すよう義務づけ、また hierarchy through clothing を確立するために、衣服着用に厳しい制限を加えた(その法令は Cod. Theod. の De vestibus holoveris et auratis に収録)。そしてユスティニアヌス時代に絹の国家独占を確立した。だが国家はモノポリーの拡大に消極的であり、ユ帝時代以降、多数の職人が国立工場に加入を希望したにもかかわらずそれを許さなかった。国立工場のメンバーを既加入組合員の子孫・親族からのみ補充し、いわば一種の労働貴族カスト(aristo-cracy of labor)に押し留めようとした法令もある。この間、国の内外での生糸の生産増は Comes Commerciorum の地位を低下せしめ、代って、kommerkiarioi という多数の関税吏が外国からの生糸購入と配分をコントロールするようになった。結果的に私的ギルドの発達も促される。ロペスはこの変化を slow “industrial revolution” とよんだ。7世紀以降このプロセスは止まることなく進行し、ついには kommerkiarioi に代って生糸商人自身が外国からの生糸の仕入れを行なうに至った。かれらは CP の物資交換所(mitata)にきた外人商人から原料を購入した。しかもその際、仕入価格に対する国家の干渉はすでになかった。つまり BE の時代には、ユ帝のモノポリーが完全に消滅し、限られた目的のためにあるカスト的国家ギルドと並んで、一般需要をみだす私的ギルドが発展していた。そのうえギルドに属さない特定の人々にも絹の生産と取引が許された。それは、既にミクヴィツも注目していたように、職人の上層であり、貴族 archontikoi prosōpa であった。アルコン(ロ

ペスによると封建領主)は、自分の領地で養蚕を行ない、隷属農民を使用して、どのギルドよりも capitalist entrepreneurs になる可能性をもっていた。もちろん、かれらが一つの階級として business spirit をもっていたとは思われず、現にこのためにかれらの industry への参加は小さいままで留まった。貴族は私的ギルドを抑えたり、ギルドの外で自己の余剰生産を捌いたりしたわけではなく、全く自由に原料を輸入して生産を拡大できたのでもない。BE はそれを許さなかった。この意味で BE は私的ギルドと非ギルド企業の妥協、また国家ギルドと私的ギルドの妥協の産物であったといつてもよい。

要するにロペスは国家ギルドの意義を評価しつつも BE 時代の CP にみられる資本主義的要素を強調したのである。

以上述べたことを少し整理するならば、30年代以降の CP の商工業史の研究は、国家の経済関与を悪としたニコルの見解を、二つの視点から葬ったといえるのであろう。一つは、国家統制がビザンツ独自のものでなく、またビザンツの国家モノポリーが本来の monopole fiscale でないことの証明によって(アンドレアデス)、いま一つは国家統制の産物と目された BE の内部にある自由主義あるいは資本主義的要素の抽出(ミクヴィツ、ロペス)によってであった。もっとも、後者の場合、いささか国家権力の干渉を低く見すぎるきらいのあったことは、否定できない。

第二次大戦ののち、BE そのものの分析および BE を中心にすえたビザンツ商工業史の研究は、専らソヴェト・東欧のビザンティニストの手に委ねられ、西欧およびアメリカでは全くといっていいほどに行なわれなくなった。ビザンツ学の諸分野のなかでもこれほどはっきりした変化は他にない。

この分野に携わるソヴェトの研究家は、M. Я. Сюзюмов と A. П. Каждан であるが、両者のあいだにはビザンツ史の基本的理解に大きな違いがあり、BE 問題も決して例外ではなかった。両者は、ロペスの指摘した imperial guilds および非ギルド私的企業の重要性を認める点では完全に一致する。とくにシュジュモフは国家工場の実体をより詳細に分析し、ὁ ἐπὶ τοῦ εἰδηκοῦ の監督のもとにあるこの工場の労働力が、裁判で力役刑を下されたもの、および国家所属の奴隷、それにギルド職人でありながら一時的に国家に備われたもの、の三種からなることを明らかにした。だがこれと同時にシュジュモフは、国立工場の職人を aristocracy of labor とするロペスの見解に反対し、なるほどかれらは一種の閉鎖的カストを形成し宮廷儀式に参加したかもしれないが、職業選択の権利もなければ自分の作業場を離れることもできない、また全く私的収入を得ること

もできないのであって、それを aristocracy と認めるわけにはいかないと反論した¹³⁾。

ビザンツ・ギルドの特質の分析、とくに内部構造の検討において、シュジュモフとカジュダンの見解は大きく対立する。

まずシュジュモフによると、CP の商工業の特徴はつぎの三つ、すなわち(1)末期ローマの *collegia* との連続、(2)組合内部の結束の弱さ、(3)奴隷の役割の大きさ、にあり、わけてもギルドにおける奴隷労働の使用がきわめて重要な意味をもった。特徴(2)——別の言い方をすれば、組合内部の同質性の欠如——もそれを招来したのはやはり奴隷の存在であった。シュジュモフは、12世紀までビザンツが国際的奴隷売買の中心だった事実注意到する。実際、ギルドの親方(肉屋・魚屋など日用品を扱う個人的小企業主を除き)、とくに奢侈品生産にタッチする親方は、きわめて容易にしかも数的制限なしに、奴隷を自分の工場(*ergasterion*)に迎えることができた。奴隷の加入禁止をはっきりとらうたったのは銀商人(*argyropratai*)と *trapezetai* にすぎず、また奴隷の行動に限定をつけたのも *katartarioi*, *serikairoi* ギルドに限られていた(生糸輸入・香料輸出の禁)。工場主は一人の保証人さえあれば、奴隷にエルガステリオンを開かせることができ、奴隷も *peculium* 管理をもとに自主的に仕事場をもつことができた。奴隷をかいらいとして新工場をつくらせる商人・手工業者もあった。だから BE にみえるエルガステリオンは、時に奴隷制的マニファクチャーの様相を呈することもあったのである。つぎに奴隷以外のギルド構成要素としては *misthotai*(臨時の賃労働者)と徒弟がある。ミストータイは、その多くが農村からの流れものであり、食費にも窮していたためギルドに採用された場合、1ヶ月分の賃金を予め支給された。ただかれらは CP の市場状況によって採否の決まる不安定な存在であり、正規のメンバーに昇格することは決してなく、また30日以上雇傭関係を結ぶことも許されなかった。もちろん契約完了後は移動の自由をもつ。最後に徒弟(*mathetai*)は BE では殆んど問題にされず、30日間の雇傭関係という観念が全く当てはまらないことは確かだとしても、その実態はミストータイに近いという以外に何も分らない。このように、ビザンツのギルドでは、相互に性格を異にする労働力が雑多に利用され、それが組合組織の弱さの原因の一つとなっていたのである¹⁴⁾。

ギルドの内部構造に関する上述のシュジュモフの見解に対し、カジュダンは、基本的にビザンツ・ギルドは西欧中世ギルドと違わないとの立場からつぎのように反論した¹⁵⁾。

まずエルガステリオンの規模を過大視してはならない。大抵の場合は親方個人とその家族の労働に依存しており、奴隷・ミストータイの数は少ない。奴隷の労働は、主に絹

生産・宝石加工に限られ、その他では石ケン造りとパン焼に使用された程度であった。またミストタイと徒弟の身分差は、前者の雇傭期限が一時的という以外には殆んど認められず、徒弟は一定年限の修業後に独立して親方となることができた。従って構造的には親方—(職人)—徒弟という西欧中世ギルドの形態に近かったのであると。つづいてカジュダン、シュジュモフやかつてステックレ、デルガーらが唱えたローマ末期 *collegia* との連続性の問題にふれ、自由人のばあい、5人の保証人の保証と、職務内容を知っているか否かの調査(シュジュモフは、BE, XII, 1, 2 からこの調査の存在を否定する)、それに入会金の支払いと社会的誓約、という4つの手続きを経て加入を認められ、ギルド間の移動・職種選択の自由も確立していた、として、*collegia* との非連続=ギルドの中世的自由を主張した。だが私は、CPの商工業研究は、BE そのものの分析もさることながら、BE の如き形でビザンツ・ギルドが整備された背景を、農村の状況をもふまえて明らかにする方向で行なわれる必要があると思う。この意味で、シュジュモフが行なったBE成立の背景の分析は非常に示唆的であったし(かれの見解について私は以前紹介したことがあるのでここでは省略したい)¹⁶⁾、ルーマニアの E. Francès もほぼ同様の視点からきわめて興味ふかい分析を行なった¹⁷⁾。すなわち、フランチェスは、ビザンツの手工業の展開を、国家専売(4—7世紀)→小商品生産(9,10世紀)の勝利、という図式(これはロベスの図式 *imperial or public guild*→*private guild* に近い)でとらえ、この変化を、ビザンツの社会体制の変化(=封建制の開始)と、それに対する国家権力の対応で説明しようとした。かれはこう考える。7世紀の危機ののち、「寄生的性格をもちつづけた奴隷制的ポリス」の衰退に対処するため、国家は、労働力の提供と商税の免除によって都市の生産を奨励し、その都市を行政組織の核にした。そして経済発展によって都市が国家権力の基礎を左右するにいたるや、政府は商工業の保護育成にさらに力を入れた。マケドニア朝が小商品生産体制の維持をはかりつつ、大貴族の商工業関与を制限し、抬頭する属州の領主層を抑えたのがそうである。またこの政策は、その収入の少なからざる部分を国税収取体系から受取っている支配者層=中小官僚層の利益に合致するものであった。だからマケドニア朝は小職人と官僚貴族との一体化と、首都民衆の支持の取付けのために、BEにみられるが如き保護と統制の政策を展開したといえてよい。しかし11世紀末に属州貴族を代表するコムネノス朝が成立すると、官僚貴族と小職人の同盟が崩壊し、イタリア商人に自己の剰余生産物を持って利益を得んとする領主層のためにビザンツ・ギルドはあえなく消滅した。「ビザンツの組合は、メンバー相互の利益を守るために作られた自治的機関の性格をもたず、国家機構に組入れられて

いたために、国家が関心を寄せなくなった時、たちまち衰退してしまったのである。」

フランチェス論文は、ミクヴィツやロペスにみられた資本制的要素の抽出の試みでは全くなく、あくまでもビザンツ史の枠内にとどまって、国家権力と CP 商工業（小商品生産）の関係を追究したものであり、シュジュモフやカジュダンの綿密な内部構造の分析と併せて、現時点の研究方向を最も集約的に示したものではないかと思われる。

II コンスタンティノープルの人口

CP の生産流通組織に関しては、今見てきたとおり実に長い研究史があった。だがそれらは CP の規模そのものの理解と殆んど無関係に行なわれてきた。近年にいたるまで多くの史家は CP の人口を約60—100万と見積り、その数字に厳密な検討を加えることをしなかった。だがアメリカを中心にして発達した中世 demography は、CP の人口研究に新たな光を投げつつある。本章ではこの問題をとり扱うことにしたい。

今から約40年前、最初の本格的な CP 人口研究の論文が A. Andréadès によって出された時、そこに示された人口数は、今からみてまさに天文学的数字であった¹⁶⁾。かれは CP の歴史を4つの時期に区分し、各々について人口の算定を試みた。それによると、

第1期（CP建設から西方帝国の滅亡まで）は約80万を下らない。何故なら、当時の史家 Sozomenus は、コ大帝が旧ローマと同じだけの人口を新都に集めたと伝え、その旧ローマは控え目に見ても約80万はあったと思われる。またこれとは別に、家屋調査・市域面積・CP が敵に与える威圧感も「人口80万」を裏付ける。これを具体的にいえば、次の4点にしばられる。(i)413年の Notitia dignitatum Orientis は、CP の domus（貴族邸宅）を4,388と記している。これはコ大帝時代のローマ市の1,797の約2.4倍にあたる。domus がこうだとすれば、商業都市である CP は 民家 (insulae) でもローマ（46,603戸）を上廻るに違いない。(ii) Sozomenos は、コ大帝が都民に1日80,000（単位不明）の小麦ないしパンの配給をしたと伝えるが、これはパン8万個ではなく、小麦8万 modioi を意味する。この量は低くみても7—8万人の口を満たすことができる。(iii) CP は一周18マイルで、ローマの約1.5倍。しかも人口増加に伴ない、コ大帝時代にすでに丘の斜面や海辺にテラス状に家を張り出していた。さらに家内奴隸や collegia 職人の多さから、市内住居地区の人口密度は非常に高く、19世紀末のローマやナポリの数字1470（人/ha）に比定される。(iv) Prokopios は、フランク人によるミラノ占領のさい、30万人の犠牲者が出たという。これは明らかに誇張があるにせよ、当時のミラノの人口は60万以上と考えられ、このミラノより CP はずっと大きい。

アンドレアデスによるとつづく第2期（西方帝国の滅亡から十字軍まで）は、戦禍・天災に見舞われた7, 8世紀, とくに8世紀に50万人以下に減ったようだが, ノーマルにはやはり80—100万とってよかった。ただこの時代はきわめて史料状態が悪く, アンドレアデスの論拠も時代的に偏りかつきわめて薄弱である。即ち, (イ)ユ帝時代, エジプトから入る小麦量は Wilcken の計算で $26\frac{1}{8}$ millions (roman modioi) だが, これは70万人分に当たる。しかも CP はエジプト以外からも小麦を輸入していた。(ロ)ニカの反乱(532年)で虐殺された反徒は3万5千あるいは5万人というが, 人口の5%が処刑されたとして, CP の人口は70—100万となる。しかも実際には5%以上死亡したとは思われない。(ハ)ヘラクレイオス帝やレオ4世による Blacherne 地区その他の市域編入, さらに属州からの強制的な人口移植策や外人の定住奨励によって CP は著しい人口減少を殆んど経験しなかった。以上三点の他に, アンドレアデスは, 具体的根拠をあげえず, わずかに約80万の人口を擁したという同時代のバクダードとの比較から, 地中海の制海権を奪回した10世紀ビザンツの首都がそれ以下とは信じがたいと結論したのである。そしてこれにつづく第3期（十字軍時代）と第4期パレオロゴス朝時代）に関しては, 主として記述史料によって, 各々80—100, 15—20万と評価した。

いま私はやや詳しくすぎる程にアンドレアデスの論旨を紹介したが, これはその後の研究がここに挙げられた史料の解釈をめぐる展開されているからである。それほどにアンドレアデスの研究は綿密な史料操作に基づいていた。だから, かれ自身が15年後の論文で自説を修正し CP の人口を約50万と, かなり低い数値を出したものの¹⁹⁾, 旧説の方が長らく学界の有力意見だったのである。だが49年に A. M. Schneider が15世紀の CP 人口を4—5万と見積って以来, アンドレアデスの説に疑いがもたれるようになった²⁰⁾。折しもアメリカを中心に中世史での demography の重要性が認識されはじめた。その成果の最初のあらわれが, J. P. Russell の, 今日はや古典的と目される著書であり, これで, 通説は完全に根拠を失った。

まずラッセルは, コ大帝の例の食糧配分“80,000”が, パンの個数なのか小麦量なのか, 後者だとすればその単位は modioi か artaba か, という問題にふれ, アンドレアデスの解釈(モディオイ説)をしりぞけてパン個数と解釈した。8万モディオイの配分は全くありえないことであった。そこでかれは人口の実数を, 4世紀末の CP の年間穀物予算(金11ポンド=現在の金になおして2億6,395万2千ドル, 1日当たり72万3千ドル)を手がかりに算出しようとする。すなわち1人1日にパン1塊を与えるとすると, 1塊の小麦量は約0.116 mod.。小麦1 mod. の価格は約85ドルであるから, 1人分の小

コンスタンティノーブルの人口と生産機構

麦は1日につき約9.8ドルとなり、結局予算は約7万人分として立てられたものと推定される。たとえ小麦1 mod. をもう少し安く約65ドルと見ても、人口は約10万程度にしかならない。それに約8万の人口がコ大帝時代、約640 ha の CP に居住した場合、人口密度は約120(人/ha)となり、この程度が、古代末・中世都市の比較研究からみても妥当な数値と思われる。テオドシウス2世の新城壁建設で市域は1200 ha に拡大したものの実際の居住地面積は約960 ha に留まり、人口も 960×120 で、約11万5千程度に留まったであろう。こう述べたあとラッセルは *Notitia dignitatum* を検討し、つぎのように推論した。ポンペイの例があてはまるとした場合、1 domus の平均面積は100 m² であるから、4388 domus では438 ha となる。CP 全体の居住地面積は960 ha だから、domus 以外の一般民家 insulae が占める面積は残り約520 ha。そして1 domus の構成員を平均10人、520 ha の人口密度を200人と仮定すると、 $(4388 \times 10) + (520 \times 200) = 147,880$ 、つまり約15万となる。そしてこの数字はアンドレアデスが無価値として棄てた Johannes Chrysostome の報告（4世紀末の CP のキリスト教徒数約10万、非信徒5万）に近く、同じころ、ローマ市の人口17万2千よりも CP の人口がやや少ないとした Ausonius の記述にも合致する。

こうしてラッセルは、4、5世紀の CP 人口を、8万から多くて15万と計算した。ただこれ以降の時期に関する分析は決して綿密ではなく、扱っている時点も多くない。わずかに6世紀と10世紀前半に言及しているにすぎない。即ち、ユスティニアヌス時代は、人口密集地が約640 ha であり、その密度を300としても（これは高すぎるが）、人口は192,000人とどまった。また10世紀30年代に、政府は CP の饑饉救済のため小麦10万 mod. を買入れたといわれるが、これが市民全体の1/4に1ヶ月間つづけて支給されたとしても、人口は10万をいくらか上廻る程度にしかならない。結局ラッセルの意見では、CP は6世紀の192,000がマクシマムであった。

この研究が、従来50万から100万の間を揺れ動いた多くの史家の算定を全く無意味なものにしたことはいうまでもない。現に、これ以後の人口研究では、J. L. Teall が、400年ころおよび10世紀に50万に近くなったといっている²³⁾ のを除けば、すべて40万以下なのである。たとえば、F. Dölger は、5—6世紀の CP の landliche Charakter と各家屋に付属する Gartenland の大きさに注目して人口を約25万と算出した²³⁾。そして D. Jacoby は、ラッセルの topographic な方法論をさらにおし進め、より詳細な数値を示した²⁴⁾。

まずヤコビーは従来の人口研究の方法および史料に厳しい批判を加え、(i)人口数を記

した記述史料 (Johannes Chrysostomos, Prokopios など) は一切人口計算の出発点となしえない。(d)穀物の輸入・配分量にもとづく試算は、ビザンツ期の個人平均消費量および実際に CP が消費した穀物量全体を確定できぬ以上ほとんど有効性はない、と断じ、さらにアンドレアデスとラッセルとが違った解釈を下したコ大帝の食糧配給に関しては、いずれをとるにも決め手はなく、「確かなのはコ大帝時代 CP の人口が8万以上だったことだけ」だと述べた。また domus の平均規模 (人的構成, 占拠面積) も、知るよしはないと斥けた。そこでヤコビーは、唯一の合理的な方法として地形学, 考古学的なデータにもとづく算出を試みた。かれは、CP 市内の多数の公共建造物の存在, 二つの城壁の間の果樹・菜園, 耕地の拡がりに注目し、かつまたベスト以前のフィレンツェ中心部と18世紀以前のヴェネチアの人口密度 (各々 400, 270人/ha) を参照にして、次表の如き結果を得たのである。

(I. Septimus-Severus 帝城壁, II. Constantinus 帝城壁と I との中間地域, III. Theodosius 帝城壁と II との中間地域)

地 域(面積) 時 代	I (200 ha)	II (500 ha)	III (700 ha)	Sykae-Galata Blacherne	Total
コンスタンティヌス帝 (人口密度) 150/30,000 (人口)	100/50,000	—	7,500	87,500	
テオドシウス II 250/50,000	200/100,000	40/28,000	10,000	188,000	
ユスティニアヌス帝 (541年以前) 500/100,000	450/225,000	50/35,000	15,000	375,000	

つまりヤコビーの結論は CP の人口は最大限40万人であり、一度もそれを越えたことはなかったというものであった。だがこれはラッセルに比べてかなり高い数字であっただけに、ラッセルの批判を免かれなかった。ラッセルだけではない。カジュダンも、若干の修正を要求してこう指摘した²⁵⁾。6世紀中葉のコ帝城壁内 (I, II) の家屋占拠面積は約 650 ha, 人口密度は350—400(人/ha), 具体的には中心部 (200 ha×400人) 8万人, 中心部以外の地(450×350)15.7万人, これにヤコビーのいうⅢ区と Galata, Blacherne の5万人を併せて、都合 28,75万を最高値と考えねばならないと。一方、ラッセルは最大値を25万とおき、その論拠を2つ挙げた²⁶⁾。1つは、1927年のイスタンブールが24.5万にすぎず、中世ヴェネチアの人口密度も決して270(人/ha)を越えなかったということ、いま1つは、中世ヨーロッパの regional capital (or metropolitan centre) は周辺人口の約1.5%を擁する、逆にいえば巨大都市を支えるには約66倍の周辺人口を必要とするのが一般原則であるが、小アジアならびにバルカンには絶対2,500万人(これで

CP 人口は37万となる)もなかったという点²⁷⁾であった。

以上を要約すると、近年の CP 人口研究の結果は、

デルガー 約25万 ヤコビー 約37.4万

カジュダン 約28.75万 ラッセル 約19.2万 (最大限25万)

となり、これ以上の数字にもどることはまずあり得ないであろう。もとよりの確な数字が出せるわけではなく、今後、補助学(たとえば建築学²⁸⁾)やイスラム期イスタンブール史研究²⁹⁾の発達に待つべきところきわめて大きい。だが CP の人口は、治安や食糧問題、そしてそれらを処理する皇帝権力の安定度と深い係わりをもっており、一応の数字のめどをつけないでビザンツ史を理解することはできないであろう。

(筆者は大阪市立大学講師)

註

1) H.-G. Beck, Konstantinopel. Zur Sozialgeschichte einer frühmittelalterlich Hauptstadt, Byz. Zeitschrift, 58 (1965), S. 14 ; id., Senat u. Volk von K/pl, Sitz. Bayer. Akad. Wiss., Philos. Hist. Kl. 1966, H. 6, S. 26—7.

2) Cf. E. Kirsten, Die byzantinische Stadt, Berichte zum XI. Intern. Byz. Kongress, München, 1958.

3) J. Nicole, Le livre du Préfet ou l'Édit de l'Empereur Léon le Sage sur les corporations de Constantinople (Genève, 1893); См. М. Я. Сюзюмов, Византийская Книга Эпарха (Москва, 1962), стр. 12—15.

4) J. Nicole, Le livre du Préfet, Revue général du droit, de la législation et de la jurisprudence, XVII (1893), pp. 134—5.

5) H. Goerig, Das Zunftwesen K/pls im 10 Jhydt., Jahrbücher für Nat. Ökon. u. Statistik, III. F., Bd. 38 (1909) ; L. Hartmann, Zur Geschichte der Zünfte im Mittelalter, Zeitschrift für Social- u. Wirtschaftsgeschichte, III (1894), S. 109—29.

6) A. Stöckle, Spätrömische u. byzantinische Zünfte, Klio, IX (1911).

7) L. Brentano, Die byzant. Volkswirtschaft, Schmollers Jahrbuch, Jg. 41, No. 2 (1917). これはのち Das Wirtschaftsleben der antiken Welt (1929) に所収(邦訳、舟越康寿『欧羅巴古代経済史概説』)。

8) Ch. Macri, L'organisation de l'économie urbaine à Byzance (Paris, 1925). 私は F. Ganshof の書評 Byzantion, IV (1929) によってしか内容は知らない。

9) B. Mendl, *Origine des corporations et l'Éparchikon biblion*, *Bidlovi sbornik*, Prague (1928)。また28—29年に書き留めた原稿は、死後21年経て、*Les corporations byzantines*, *Byzantinoslavica*, XXII (1961) として公けにされた。

10) A. Andréadès, *Byzance. Paradis du monopole et du privilège*, *Byzantion*, IX (1934); cf. id., *The Economic Life of the Byz. Empire* (in "Byzantium" edited by N. H. Baynes & H. L. Moss.)

11) G. Mickwitz, *Un problème d'influence: Byzance et l'économie de l'Occidental médiéval*, *Annales d'histoire économique et sociale*, (1937, No. 37); id., *Die Kartellfunktionen der Zünfte u. ihre Bedeutung bei der Entstehung der Zunftwesens* (Helsingfors, 1936), S. 205 sq.

12) R. S. Lopez, *Silk Industry in the Byz. Empire*, *Speculum*, XX (1945), pp. 1—16.

13) М. Я. Сюзюмов, *Ремесло и торговля в Константинополе в начале X в.*, *Визант. Временник*, IV (1951), стр. 27—9.

14) Там же, стр. 13—22; эго, *Византийская Книга Эпарха*, стр. 33—9.

15) А. П. Каждан, *Цехи и государственные мастерские в Константинополе в IX—X вв.*, *Виз. Врем.*, VI (1953); эго, *Деревня и город в Византии IX—X вв.*, (Москва, 1960), стр. 312—9.

16) М. Я. Сюзюмов, *Византийская Книга Эпарха*, стр. 5—12; эго, *Борьба за пути развития феодальных отношений в Византии*, *Визант. Очерки* (Москва, 1961), стр. 48 sq. 私は前書を『西洋史学』61 (1964) で紹介した。

17) E. Francès, *L'état et les métiers à Byzance*, *Byzantinoslavica*, XXIII (1962); id., *La disparition des corporations byzantins*, *Rapports à la 12^e Congrès Intern. des Études Byzantines* (Ochrida, 1961).

18) A. Andréadès, *La population de Constantinople sous les empereurs byzantins*, *Metron I* (1920), pp. 68—107.

19) Id., *La population de l'empire byzantin*, *Bulletin de l'Institut archéologique bulgare*, IX (1935)=*Actes du IV^e Congrès Intern. des Études Byzantines* (Sofia, 1935), pp. 117—26.

20) A. M. Schneider, *Die Bevölkerung K/pls im XV. Jhrdt.*, *Nachrichten d. Akad. Wiss. in Göttingen, Philos.-Hist. Kl.* 1949.

21) J. C. Russell, *Late Ancient and Medieval Population* (Philadelphia, 1958), esp. pp. 66, 93, 99.

22) J. L. Teall, *The Grain Supply of the Byz. Empire 330—1025*, *Dumbarton Oaks*

コンスタンティノープルの人口と生産機構

Papers, XIII (1959), Appendices A ; H.-G. Beck, Konstantinopel, S. 12. も 6 世紀の人口を 50 万程度と見ている。

23) F. Dölger, Die frühbyzant. u. byzant. beeinflusste Stadt (V—VIII), Atti del 3° Congresso Internazionale di Studi sull' Alto Medio Evo, Spoleto, 1959 (=ders. ΠΑΡΑ-ΣΠΟΡΑ, Ettal, 1961, S. 117—8).

24) D. Jacoby, La population de Constantinople à l'époque byzantin : un problème de démographie urbaine, Byzantion, XXXI (1961).

25) А. П. Каждан, Рецензия, Вопросы Истории, 1962, No. 5 стр. 191—2.

26) J. C. Russell, Recent Advances in Medieval Demography, Speculum, XL (1965), p. 91.

27) Id., The Metropolitan City Region of the Middle Ages, Journal of Regional Science, II (1960), pp. 62—5.

28) Cf. A. Kriesis, Über den Wohnhaustyp des frühen K/pls, Byz. Zeitschrift, LIII (1960), S. 322—32. かれは 1 つの仮説的数値とことわりつつ, CP の domus 占拠面積の算定を試みた。

CPの地区	面積 (ha)	domus 概数	1 domusあたり面積 (ha)	1 domusあたりの平均面積 (m ²)	三大地域の相互比
I	40.216	118	0.3408	2,967	3.86
II	27.243	98	0.2780		
III	25.513	94	0.2715		
IV	22.702	375	0.0605	771	1.00
V	19.999	184	0.1086		
VI	35.331	484	0.0729		
VII	47.459	711	0.0667		
VIII	51.243	108	0.4735*	1,780	2.30
IX	59.135	116	0.5097*		
X	114.161	636	0.1795		
XI a	78.486	503	0.1560		
XI B	182.593		0.5190*		
XII a	72.108	363	0.1986		
XII B	161.609		0.6438*		
XIII	—	431	—	0.7243*	
XIV	120.972	161			

XI, XII区の a はコンスタンチヌス城壁の内, B は外

(*) は新たに市域に加えられたり, 地理的に家屋の少ないところで, 1 domus あたりの面積も大きい。ために, ここでは例外あつかいする。

29) Cf. O. L. Barkan, Essai sur les données statistiques des registres de recensement dans l'empire ottoman aux XV^e et XVI^e siècles, Journal of Economic and Social History of the Orient, I (1957) ; R. Mantran, La vie quotidienne à Constantinople au temps de

Soliman le Magnifique (Paris, 1965), pp. 60 sq. ここではイスタンブールの16—7世紀の人口密度を150~185(人/ha)とみている。